

高校における CLIL 授業の楽しみと課題

笹島 茂

1. 授業の楽しみ

私は、現在女子大学で英語教育と教職課程に携わっている。以前は埼玉の高校教師をし、医科大学で医学教育にも関わった。その間、英語教育及び教師教育を主たる研究実践領域としてティーチャー・リサーチ(teacher research)を探求し、自分をティーチャー・リサーチャー(teacher researcher)と考えている。その中で出会ったのが最近徐々に注目されるようになってきている CLIL (Content and Language Integrated Learning)という「科目内容(テーマ)と言語の統合学習」である。

本稿では、高校教育での CLIL 推進の意味、CLIL の基本的な特徴、高校教育における CLIL の現状、CLIL の課題について言及する。CLIL には今後の日本の教育全体が発展するためのヒントがあると考えている。理解の一助となれば幸いである。

2. CLIL のススメ

CLIL は、簡単に言うと、その名前の通り、学習する内容と学習する言語を統合して学ぶことで、統合的な学習目標を効率よく学習者の自律を促進しながら達成しようと意図する教育のことを総称している。1990 年代に EU(ヨーロッパ連合)が推進し始めたカリキュラムで、2000 年代に入り急速に普及し、現在では EU 統合の言語政策の一つとして多くの国で多様に浸透している。もちろん課題や批判もあるが、英語を中心とする多言語状況に対応し、EU 域内で活動しようとする学習者には好意的に受け入れられ、教科の内容を目標言語で教えることができる教師が存在することも背景となり、政策的にも草の根的にも広がりを見せている。それとともに、CLIL という用語をあえて使わなくても、英語などの外国語教育でもその影響は大きくなり、CLIL のアイデアは教育全体に相乗効果を与えている。

日本でも認知度は少しずつ高くなっているが、まだどうも誤解が多いような気がする。その一因は

CLIL の成り立ちにあるのかもしれない。ここで私なりに整理した CLIL 教育をまとめておきたい。というのは、CLIL の考え方は日々の授業で悩む英語教師に何か新しい視点を与えてくれると考えるからだ。私自身がそうであったように、これまでの英語教育に何かモヤモヤしたものがあの人には、CLIL は特効薬かもしれない。自分の授業の何かを変えたいと考える人には、CLIL が学ぶことと教えることの意味を再確認させてくれると考える。

3. 高校における CLIL

まず確認しておきたいことは、CLIL は決して新しい学習ではないことである。バイリンガル教育の一環として考えてよいが、ごく自然な必要に迫られた学習形態と言ってよい。しかし、CLIL とバイリンガル教育を隔てる点は、CLIL がごくふつうの学校教育に導入されているということと、学習状況に応じて様々な展開が可能となっていることにある。バイリンガル教育やイマージョンがカリキュラムとして実施されることが多いのに対して、CLIL は必ずしもそのような枠組を必要としない。各教科の中でも生徒の同意があれば教師が選択できる。

その点を踏まえて、日本の高校教育においてどのように導入できるかを、これまでの研究と実践をもとに、CLIL 実践のポイントを整理して、CLIL の CLIL たる所以を以下にまとめる。

・すべての教師は言語教師(Every teacher is a language teacher)

CLIL を考える上で一番大切なことはやはり学ぶ内容で、その際に言語を意識することにある。小学校や中学校の教師は日本語を意識して各教科を指導する。しかし、高校ではこの点がおろそかになりがちだ。CLIL では目標言語や母語などいくつかの言語を同時に意識することが大切である。CLIL は学ぶ内容に焦点を当てているが、大切な点はやはり言

語にある。その点から、日本で多くの英語の教師が CLIL に興味を持つのは当然と言える。

英語を学ぶには日本語を含む言語を意識すること (language awareness) も大切である。言語はすべての内容や思考と関連し、さらには言語の背景にある文化を意識することが欠かせない。その点から、CLIL は学びの統合的な活動を意識させることに役立ち、「すべての教師は言語教師」という点で、国語と英語など各教科の敷居を明確に分けるのではなく、統合学習の基盤をつくり、学びを活性化する可能性がある。この点は CLIL の基本である。

・統合学習 (integrated learning)

CLIL は内容と言語を統合した学習で、学習者には負担を強いると考えるのがふつうだろう。しかし、効果的な面が多々あることは実践が証明している。背景には複雑な学びのプロセスがあり、内容と言語の学習の複雑な関係性が逆に学習者の意欲を喚起していると予想される。教師も授業を活性化する CLIL の学びに気づくようになった。多言語多文化社会とともにグローバル化が進む中で、言語や文化の理解は多様な知識や思考と関連させる必要が出てきた。その意味から CLIL は必然的な統合教育として生まれ、発展したと言えるだろう。

・CLIL の 4C フレームワーク (the 4C's framework)

CLIL の研究者の一人である Do Coyle が 1999 年に提起した 4 つの特徴は、次のように C で始まることばで表されている。

CONTENT (教科科目やテーマの学習内容)

COGNITION (学習の認知的側面、方略など)

COMMUNICATION (コミュニケーション)

CULTURE (文化、文化間理解など)

CLIL ではこの 4 つの特徴が互いに相互作用的に機能しているという考え方であるが、これらは一つの指針に過ぎない。Coyle 自身も強調するように状況 (context) によって変化し、緩やかな枠組として利用することを推奨している。しかし、CLIL を実施する上での指針としては最も浸透していると言ってよいだろう。私自身もこの 4C を CLIL 実践の基準として利用している。

この 4C を少し詳しく具体的に日本の高校現場を対象として考えてみると次のように記述できる。

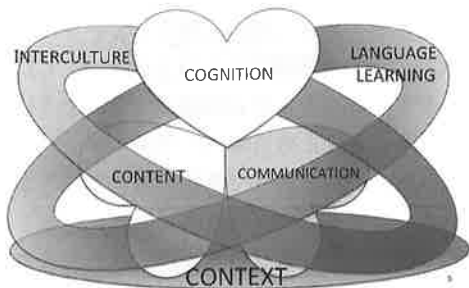
CONTENT
CLIL は、数学、化学、生物、地理、世界史などの教科に関連した英語の教材をもとに英語を中心として学ぶ。日本での CLIL は、教師が英語で当該教科を教えるのではなく、英語の授業の一環として CLIL を取り入れるほうがよい。教師は題材を提供し、生徒が自律的に学び、教師とともに考える。教師がすべて管理する必要はない。高校の英語コミュニケーションの教科書は多様な題材を扱っているため、その発展的な学習と考え、「主体的・対話的で深い学び」を英語と日本語で展開する。
COGNITION
高校の英語学習は、一般的に単語や表現をおぼえ、聞いて読んで質問に答え、文法問題を解き、テストを受けるという活動が主となる。CLIL は少し違う。英語の内容に重きを置き、自律的に考え、理解し、意味のやりとりをする。このような活動を教師が提供し、思考することを重視する。
COMMUNICATION
日本の授業環境では生徒が英語でコミュニケーションすることがむずかしい。クラスサイズが大きく、生徒が自主的に英語を使う雰囲気ができにくい。CLIL では、教師がまず英語を使うことと、かつ、英語で発表するタスクを設定することを重視する。その際のポイントは、生徒に英語を強制しないこと、誤りに寛容なこと、日本語による意味のやりとりも許容すること、英語を自然に使うことを促すことだ。教師の役割は、そのような場を提供し、言語学習を支援することにある。
CULTURE
日本の社会(学校)環境では、自分の文化と相手の文化との相互調整を意識的に考えることが少ない。CLIL では、ふつうの英語の授業よりも学ぶ内容に焦点を当てることで、学習文化の違い、学習者同士の違い、英語と日本語の言語の違いなど、相互の文化を意識する機会をつくる。この相互文化意識 (intercultural awareness) を、CLIL では重要視する。その意識が英語を学ぶことにもよい影響を与える。CLIL はそれを大切にする。

ヨーロッパのようにカリキュラムに英語で教科を学ぶ環境が設定されていれば、一般の高校で教科の教師が英語で教えることも可能であるが、日本ではむずかしいのが現状だ。その場合、英語の授業を中心として CLIL を扱うことが大切だろう。教科の教師との協力が可能であれば、教科間連携として展開することもできるが、無理をする必要はない。

CLIL ありきではなく、教師がまず授業を楽しむことが大切である。

この4Cを私は自分のCLIL指導の柱にしているが、Coyleが述べるように関わる学習状況に合わせて柔軟に加工している。そして次のようなCLILフレームワークにもとづいてCLILを実践している。おそらく高校現場でも適応可能と考える。

日本におけるCLILフレームワーク



このフレームワークのポイントはCOGNITIONが中心にあることで、LANGUAGE LEARNINGとINTERCULTUREを考慮している点にある。英語は必要な技能であるが、それだけでは決してうまくいかない。英語という言語の知識だけでも何も面白くない。学ぶ楽しみはやはり思考にある。

・言語と思考

CLILの言語は、The Language Triptychと表現される「言語の3つの役割」で整理される。

Language of learning 学習の言語 (学習内容に関わる語句表現など)
Language for learning 学習のための言語 (学習活動の中で必要となる言語表現)
Language through learning 学習の中で出会う言語 (学習過程の中で必要に迫られて予期せずに学ぶ言語：CLILに特徴的な言語)

CLILの基本は、言語の発音、文法、語彙などを積み上げ式に学習することではなく、どちらかという、偶然性(incidental)、暗黙性(implicit)を大切にしていることにある。だからといって、言語指導をなおざりにしているわけではない。CLILは、コミュニケーション重視の言語指導(Communicative Language Teaching)であり、それを発展させたCEFR (the Common European Framework of

Reference for Languages)(ヨーロッパ言語共通参照枠)を基盤としている。CLILの言語学習の目的は、コミュニケーション能力の育成にあり、多言語多文化に対応した複言語複文化主義の推進にあり、EUの移動の促進と平和にある。

それとともに、CLILの目的のひとつは自律学習の促進にある。ヨーロッパ市民がEU域内で仕事や学習を相互に共有できるようにすることだ。その点から学びを多面的に考え、思考力の育成に焦点を当てている。言語の中で英語は現時点で重要な位置を占めているが、英語だけでは十分ではないことも視野に入れ、言語と思考を関連させた学習の機会を提供している。その一つのアプローチとしてCLILは登場したと言ってよいだろう。

CLILでよく参照されるBenjamin Bloomの教育目標分類(Bloom's Taxonomy of Educational Objectives)は、思考面の育成で言及されている。CLILでは次の修正された段階がよく使われている。表では、高次思考力(HOTS: higher order thinking skills)から低次思考力(LOTS: lower order thinking skills)へと思考の段階が示されている。

創造(Creating)	例 計画, 発明, 工夫
評価(Evaluating)	例 試行, 判断, 仮定
分析(Analyzing)	例 比較, 統合, 批判
応用(Applying)	例 履行, 実施, 利用
理解(Understanding)	例 比較, 説明, 分類
記憶(Remembering)	例 認識, 記述, リスト

この分類はCLILに特徴的な考えではないが、CLILではこのような思考力を考慮して言語を扱うことを大切にする傾向がある。しかし、状況によりやはりむずかしい点があるので、CLILを実際に展開する上であまり拘り定規に考える必要はない。大切なことは学習者自身が考えることにある。

・その他のCLILの特徴

高校でCLIL指導を実践するうえで考慮することは、他にも多々あるが、ここでは省略する。しかし、それらはすべてCLILだけの特徴ではない。あえて言えば、どのような指導も受け入れてしまう点にCLILの特徴がある。なぜかと言えば、統合学習だからである。よいものはなんでも取り入れ、学習者自身が学びを工夫することにCLILの価値がある。

4. 高校教育と CLIL

CLIL は実は高校教育には最も適している学びだと考える。実際すでに多くの実践がある。スーパーグローバルハイスクール(SGH)、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)などを中心に、CLIL とは言わないまでも同様の考え方で教育が行われている。CLIL 教育を推進する目的で設立された日本 CLIL 教育学会(J-CLIL) (<https://www.j-clil.com>)でも多くの実践が報告されている。ますます CLIL に対する期待が大きくなっていると言えるだろう。

CLIL を取り入れる(ようとしている)学校は、いわゆる「英語で授業をする」という基本的な考え方があるようだ。もちろん、CLIL ではなく北米で行われている ESL の考え方が基盤にあるとも言えるだろうし、変わりつつある大学受験の影響もある。CLIL と言うかどうかは別にして、同様の授業が学習者のニーズに応じて展開されることは望ましい。多くの国や地域で教育は多様化している。外国語学習が英語だけという時代ではない。英語圏でも外国語学習は一律ではないが、個別化し普及している。日本の教育もそのニーズに応える必要がある。

それとともに課題がますます複雑になっていることも意識する必要があるだろう。画一化した受験や部活動だけを目的とした高校教育は発展性がない。グローバル教育が叫ばれているが、英語や ICT や留学などを推進するだけでは目標は達成しにくい。一部のエリートだけを育成することも問題がある。これらの課題をすべて解決する得策は簡単には見付からないが、CLIL は一つの選択肢となるだろう。

CLIL は面白い教育だと考えている。私自身が経験した範囲ではあるが、CLIL は多くの学習の中で学習者に比較的好評に受け取られているようだ。CLIL の最大のポイントは、学習者が学びたいことを学ぶことだ。言い方を換えると、学習者のニーズに適した英語の学びの機会を提供するとも言える。この点は、今後も研究と実践を通して明らかにされると確信している。興味のある方は、日本 CLIL 教育学会(J-CLIL)に参加していただきたい。

5. CLIL の課題

CLIL の特徴は多様性と柔軟性である。その分誤解も多く、また、「結局 CLIL って何?」という問いが相変わらず続く。これは日本だけではない。ヨ

ーロッパでもそうだ。おそらく今後もそうであるが、だからと言って、CLIL は消滅しないだろう。理由はごく当たり前の教育だからである。

ただし、今後取り組むべき課題はいくつかある。ここではその課題のいくつかを高校教育に特化して整理してまとめたい。

まず、教育課程の編成である。学習指導要領の教科のしぼりに柔軟性を持たせることが必要だろう。教科間連携などがもっと実施しやすいような仕組みをつくるべきであり、英語に特化している外国語という教科の枠組も多様化したほうがよい。CLIL を実施しやすいカリキュラム開発ができるようにすることが重要な課題と考える。

次に、教員養成と研修である。現在のような教科専任制を緩やかにして、複数教科の教員免許を取得できるようにする。教員の職務の範囲を明確にして、役割も分担すべきだろう。現在のような部活動指導などの曖昧な仕組みは廃止して、教員の仕事の範囲と役割を明確にする必要がある。その上で、CLIL 教育を理解し指導できる教員を養成すべきだろう。それとともに、研修を通してカリキュラム開発や教材開発を推進することが大切だ。

CLIL はヨーロッパの政策で始まったが、普及した背景には教師の力が大きい。従来の外国語教育のあり方に満足しない人が、実践的な考え方から、英語(あるいはその他の言語)を道具として学ぶ楽しさを子ども達に伝えようとした。その動きを EU が政策的に応援して推進したことに普及のポイントがある。この原動力となったのは、教師が教えることを「楽しい」と思ったことと、生徒が「おもしろい」と思ったことである。よい学びはこのような単純なことから始まるのだろう。

参考文献

- Coyle, D. (1999). Supporting students in content and language integrated learning contexts: Planning for effective classrooms. In J. Masih (Ed.), *Learning through a foreign language: Models, methods and outcomes* (pp. 46-62). London: CILT Publications.

(東洋英和女学院大学 教授)